

災害を聞く

災害を振り返る上で、災害を経験された方の体験から得られる教訓は非常に重要なものとなります。7・18水害を実際に経験された3人に今回お話を伺いました。



徳田 巳代子さん (徳田)

忘れられない

あの日の出来事

——当時の職業は

御霊中学校の1年生でした。

——当時のお住まいは

徳田の商店街にありました。当時は今のような堤防はなく、有田川まですぐ行くことから、川のそばまで家が建っているという状況でした。

——水害に気付いたのはいつですか

18日の朝6時ごろに起床したとき

には家の裏側まで水が迫っていた状態でした。前日から雨が降っていましたが、あれほどの被害になるとは想像していませんでした。

——どのような被害にあわれましたか

家の中にあつた荷物や家財道具を近所の家に運んでいたところ、みるみるうちに水が押し寄せてきてしまい、家族と一緒に濁流に流されました。私は流された先にあつた徳田地内の小高い丘、通称「しまで」で救助されたのです。父は有田鉄道の金屋口まで、母はさらに遠く、箕島まで流されてしまったのですが、漁船の漁師さんに助けられて一命をとりとめました。残念ながら、祖母と2人の妹は帰らぬ人となってしまいました。あの日の出来事は、今も忘れることができません。

——被災後、どのような生活でしたか

上徳田や金屋に一時的に避難をした後、また徳田へと戻りました。応急的な住宅も建設され、中学校も早期に再開されました。土砂で辺り一面が埋まり、有田鉄道の車両が倒れていた徳田の商店街が、次第に復興していく様子には感慨深い思いがしました。

助け合い

支え合ったあの日

——当時の職業は

御霊中学校の1年生でした。

——当時のお住まいは

今とは違いますが、同じ徳田です。

——水害に気付いたのはいつですか

普段であれば母の仕事の手伝いをするために早朝から起きるのですが、18日は雨で仕事がなく、いつもより長く睡眠をとっていました。朝6時ごろ、隣に住む祖母が私たちに知らせに来てくれて、初めて気付きました。

——どのような被害にあわれましたか

起床すると、家の上り口まで浸水していました。一段高くなっていた近所のお宅まで逃げた際は、裸足でした。それでも10分とたたずに浸水が始まり、さらに高い所へ逃げました。ところが、その場所にも水は押



赤井 長子さん (徳田)

し寄せ、「しまで」へと避難することになります。昔からの言い伝えで、水害があつても最後まで残ると言われていたからです。流されて来た人も「しまで」から差し出した竹の棒につかまって助かった方がいました。母が自宅の屋根裏に移していた荷物は、このときには流されてしまっていました。

——どの瞬間が印象に残っていますか

「しまで」には近所の人たちも集まっていたのですが、次第に水位が上がってきたのです。危機的な状況に、いとこが上げた「死にたくない」と悲痛な叫び声が耳から離れませんでした。また、差し出した竹の棒をつかみながらも、家族がすでに流されてしまったことを理由に、自ら手を離れた方がいました。その方は手を離すときに頭を下げて流されていったのです。



徳田区内に残る「水害横死者之碑」毎年7月18日に徳田地区の方々が慰霊祭を営まれています。